

保育計画(新規事業計画)成果報告書

法人名等	株式会社グローブアカデミー
施設名	うちゅー保育園
報告者（役職）	可児 小百合（園長）
住所・連絡先	滋賀県甲賀市水口町東名坂 287-2 中島スポーツ 2 F
	☎ 0748-63-0089
	E-mail uchu@globeacad.jp

○タイトル（保育計画 or 新規事業計画）

野を越え、山越え、川を飛び越え、命を守れる身体と心をつくろう！！

○主な助成備品

カラーマット、プレイフォームマット（でこぼこマット）、ブロックマット三角

1. 保育計画(新規事業計画)策定の目的

うちゅー保育園は商業テナントの2階にあり、園舎に入るためには大人用の階段を利用しないといけません。また小規模保育園ということもあり園庭がなく、外で身体を動かそうと思うと園外に出て、近隣の公園までいかなければならないという状況下にあります。

低年齢の子どもたちが身体を思いっきり動かしたり、自分の身体に興味を持ったり、身体を自由に思いのままに動かすために必要な動きを取り入れて遊ぶことを目指して今回の計画を考えました。また、獲得した動きは小さな子が大人用の高さの階段を自分の力で安全に上り下りできる動きにもつながり、近隣の公園まで行くための足腰を作る土台にもなると考えます。そのため、うちゅー保育園に通う子どもたちに平坦な場だけでは獲得できない「またぐ」「くぐる」「飛び越える」「よじ登る」「滑り降りる」「這う」「バランスをとる」「飛び降りる」など様々な動きを遊びの中から習得し、何事にもチャレンジしてみようと思える心と身体を作っていきたいと考えています。

2. 具体的な実施内容

【0歳児】

0歳児は月齢によって身体の動かし方に大きな幅があるため、それぞれの子どもが身体を動かしてみたい、身体を動かすことが楽しいと思えるようにしました。日常的にマットやトンネルを出すことで、ころころと横に転がりリラックスして遊ぶ姿や自立しているマットに体重を預け、つかまり立ちを行っている姿が見られました。また、三角マットの上

にカラーマットをかぶせて山にしたものでは、ハイハイで上り下りし身体全体を使い遊ぶ姿も見ることができました。歩き始めた子は保育者に手を持ってもらい立ったままマットの山を上り下りしていました。各月齢や子どもの能力に合わせてチャレンジしてみようとする心が育まれたように思います。

組み立て式のでこぼこマットでは、形を四角のトンネル型にすることで反対側にいる子どもや保育士と「ばあー」とコミュニケーションをとることができ、遊びながら空間の認識が可能な遊びとなりました。トンネルの内側、外側を交互に覗いたり、トンネルの先に保育者や友だちがいないとトンネルの内側をたたき『覗いてほしい!』と思いを伝えて遊んだりする姿も見ることができました。マットの形を平面だけでなく立体的に使うことで子ども達の感性も広がったように思います。



【1歳児】

1歳児ではカラーマットやでこぼこマットを使ってサーキット遊びができるように配置します。子どもたちのイメージが膨らむように山や川のイメージを用いて冒険心を高めて遊びを展開していきます。サーキット遊びにすることで回遊し待ち時間がなく遊ぶことができ、常に動き回り、周囲の子がどこにいてどのように動いたらぶつからないかなどの周辺を観察する力も養えるように動きを取り入れました。遊びを展開していく中で、子どもたちがカラーマットの山を上り下りするだけでなく、足からや頭から滑り降りたり、カラーマットのてっぺんから飛んでみたり、それぞれが新たな動きを取り入れて遊びを展開し、周囲の友だちにも新たな動きが広がる場面がありました。その際も危険だからと止めるのではなく、子どもたちのやってみたいという思いを第一にし、見守る保育者がいかに安全にフォローできるかに重点を置くようにしました。そうすることでチャレンジしたい子はどんどんと高みを目指し、苦手な子、怖い子は自分なりの楽しめる動きに何度もチャレンジし、回数を重ねて身体を動かして遊ぶことができていました。



【2歳児】

2歳児でも1歳児と同じようにサーキット運動を中心とし、子どもたちの待ち時間がなないように回遊的に遊びを広げていきました。0歳児や1歳児と一緒に遊ぶ時には小さい子の動きをみながら、周囲の子が危なくないように自分たちで動きに制限をかけて安全に気を付けて遊ぶ姿が見られていましたが、2歳児だけが遊ぶ際には写真のように立体的にしたでこぼこマットの上からジャンプをしてみたり、三角マットを利用して園舎の壁をよじ登る足掛かりにしたりとダイナミックに遊ぶ姿が見られていました。不安定な場所でも遊ぶことでどこまでしたら落ちてしまうのか、身体のどこに重心を置くとバランスが崩れるのかなど失敗を繰り返しながら自然と身につけながら遊んでいる姿が見られました。

カラーマットは【己】の形にして立たせることで、迷路のような遊びにつなげたり、勢いよく走ってきた後に素早く止まり細やかな動きに変えるという頭と身体を瞬時に切り替える遊びなどに活用したりすることができました。子どもたちが体をうまく使い身のこなしをうまくすることにつながった遊びになっていました。



【階段滑り台】

階段滑り台は、計画当初、避難訓練にも用いることを想定し、遊びにしていました。遊びの中で施設をうまく利用し、ダイナミックな滑り台として活用することができました。カラーマットでいつもより狭いスペースの階段をうまく登ったり、滑り降りるときにバランスをうまくとり、座りながら滑ることができるようになったりと遊びを展開していく中で子どもたちなりの運動機能の成長が見られました。状況としては階段一段一段が高いためマットを敷くと傾斜の強い滑り台となり、バランスがうまく取れないと寝転がりながら滑る姿になっていました。回数を重ねるごとに座って滑り降りる子が増えてきていました。

滑り台を楽しむという子には、身体づくりの遊びになっていましたが、緊急時にマットを階段に安全に設置するという点では避難用として使用することは現実的ではないという結論に行きつきました。



3. その成果と評価

以上のような活動をした結果、子どもたちは今までよりも積極的に身体を動かして遊ぶようになる姿が増え、近隣の公園に出かける際も散歩カートに乗らずに歩いていく子も増えました。また、公園で遊んでいてもころぶ回数が少なくなったように感じます。子どもたち一人ひとりの身体の身のこなしが洗練化されたことがその結果につながったと考えられます。日常的に使用する階段も0歳児でさえ月齢が高くなると保護者や保育者に手を持ってもらい歩いて上り下りする姿があり、それを続けていくことでより安全に階段の上り下りがスムーズになり、避難時の最速の行動にもつながるように感じました。

身体の動きが増える以外の部分でも、サーキット遊びやマット遊びを「もっとしたい」と思えるようになったようで、子どもたちが率先してマットを運んだり、サーキット遊びの準備をしたりする姿も増えていました。



4. 今後の課題と展望

今後の課題としては、身体を動かすことが苦手な子、新しいことにチャレンジすることに消極的な子などが、いかに苦手意識を持たずに身体を動かす楽しさを味わえるかということです。運動が好きな子、得意な子は自ら進んで遊びを展開していただけますが、苦手な子はその展開された遊びについていくことが難しく、かといって自ら何かを展開できるほど夢中になることが難しい。そのような子が自分のペースで少しずつ身体を動かすことの楽しさや、俊敏な動きをしている友だちと同じように身体を動かしたいと思えるような遊びの展開や仕掛けを、保育者が子ども中心にして考えていく必要があると考えます。

以上